

---

## 校長メッセージ ～合言葉は「子どもに軸足！」～

東長良中学校 丹羽

---

### リーダーには「仕切る力」よりも 「助ける力」を徹底して付けていきたい

集団にはリーダーが必要なことは言うまでもありません。ところで、一般に子どものリーダーと言うとたいいていの教師は、教師の目指す方向に向かいメンバーを力強く引っ張っていくリーダーをイメージします。彼らは教師の期待と指示を受け、いわば「ミニ先生」や「中間管理職」的な要素をもちながら学級を仕切っていきます。とりわけ小学校では、他の子どもも従順にリーダーに従う傾向があるために重用され、そういう子どもをリーダーとして育て、時には学級運営や学級の問題解決すらリーダーに“丸投げ”することもあります。しかしながら、そういう形で育てられてきたリーダーは周囲のメンバーの成長とともに、教師の命を受けて自分達に指示していることを嫌う者たちの反発から、力を発揮することができなくなりたいていは挫折を味わいます。そしてリーダーの役はもう“こりごりした”という心境になっていきます。

中学校ではそのことは顕著であり、誰もリーダーになりたがらなくなります。リーダーは時間の経過とともにメンバーの信頼を増していくことが通常の姿でなければなりません。この問題を解決するには、上にも述べた「専制的リーダー」ではなく、民主的な「支援的なリーダー」を学級に育てることしか方法はありません。具体的には、目標達成に向けて集団をうまくリードしたり、活動や話し合いをできるだけ生産的に組織したりする（課題達成機能）ことに加え、「集団の中で弱い子の一番の味方になる」、「困っている子をやさしく助ける」、「できるだけみんな平等に出番を与える」、「目立たない子を支えて自信をもたせる」、「人間関係のトラブルをうまく調整する」、「仲間はずれを絶対に出さない配慮を進んで行う」、このような役割（集団維持機能）もリーダーの大事な機能として重視し、学級にできるだけ多くのことができる子どもを育成することです。目指すリーダーの育成には、教師がモデルになることはもちろんですが、従来型の高いリーダー性を身に付けている子どもにこそ、さらにそんなやさしい心遣い出来るような指導を徹底して行いたいものです。彼らには余力があるので、心構えさえできれば友だちのために自分の時間を使うことは十分に可能なはず

です。  
とりあえずは小集団での活動を通して多くの経験を積ませ、「仕切る力」よりも「助ける力」、それもやさしく助ける力を重点的につけさせてやりたいと思います。その根底には「友だちへの思いやり」も必要ですが、「友だちが困っていることで自分の心が痛む」という心情こそが行為の何よりの動機になるならば言うことはありません。教師のそんな心情の醸成へのアプローチも合わせて行いたいのです。ところで、「リーダーシップ」はどんな子どもにも必要な資質として身につけさせることが必要です。例えば班の司会などは学級の誰もが遜色なくできるようにしたいものです。他に班内でも役割分担の工夫を行い、その役割遂行の場面ではリーダーシップをとらせます。リーダーの役割がなかなか遂行できない子でも、練習の場を多くし自信がもてるようになるまで、支援的なリーダーを中心としメンバーが温かさと同様に裏打ちされた良質なフォロアーシップを発揮することで支援していきたいのです。このような活動が保障されるのは、小集団の場面が最適です。

支援的なリーダーは、意識して育てようとしなければ育ちません。例えばリーダー指導の中で、集団を動かすためには集団全体を相手にするのではなく、メンバー一人一人との親密な関係をどう築くかがポイントであること。その秘訣は、「人間は困った時に助けてもらった恩は決して忘れない、しかし見て見ぬふりをされた恨みはもっと忘れない」、「相手のよさ（とりわけ自分よりも優れている点）を心から認めること」「みんなのためにがんばったことは誰よりも感謝する」といったことを伝えていきたいと思います。